

フランス語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和4年度共通テストの「フランス語」は、一昨年まで実施されたセンター試験の枠組みを受け継いだ昨年からの共通テストを踏襲し、『筆記』試験を課し、リスニングテストは実施しないという方針の下、作成、実施された。

テスト結果は、受験者102名（前年度共通テスト(1)88名）、平均得点は100点満点換算で56.87点（同64.84点）、最高99点、最低15点（同100点、15点）であった。なお、平均点はセンター試験を含めて過去最低であった。この低い平均点についての理由も、この報告で考察してみる。

出題形式については、昨年度のそれを踏襲している。第1問は発音問題、第2問は「書き換え」問題、第3問は文法問題、第4問は語彙の知識を問う問題、第5問は対話文完成問題、第6問は整序作文問題である。第7問は資料読みとり問題でA、Bに分かれての出題形式であり、いずれも実際の運用場面を想定した問題である。第8問は読解力が問われる長文問題である。

なお、評価に当たっては、14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

報告の方針

今回の報告は、上記の点を踏まえ、次の4点を分析の中心とする。

- (1) 受験者の実力差を判定できる試験となっていたか。知識があり、深く考えた結果、不正解になってしまうことがないか、ということの特に関心したい。少人数の集団が対象であるだけに、その点に関しては大人数の科目以上に要求が強くなるが、御理解を賜りたい。
- (2) 特定の要素に偏らない、総合的な学力を問う問題であったか。
- (3) 高等学校の学習範囲から逸脱しない問題であったか。
- (4) フランス語圏滞在経験などが解答の可否に大きく影響していないか。

2 内容・範囲など

フランス語を高校から選択学習する高校生の学習環境を考慮した問題作成を希望している。共通テスト2年目として、昨年の出題との変化についてもとりあげていく。主な形式と内容はともに昨年の共通テストを踏襲した形であった。

第1問 フランス語におけるつづり字と発音間の規則性を理解しているかを問う問題である。基本ルールを問う問題に限る傾向は望ましい。

問1では語末の子音 *-s* を発音するかどうかが出題された。問2は *-im-*、*-ym-* の発音を問うもの、問3は語中の *-b-* の音、問4は *-lle* が後続する際の母音の発音問題だが、いずれも出題語は基本語で解答は難しすぎない。問5には毎回リエゾンに関して出題される。今回は「単数名詞と後続する付加形容詞間ではリエゾンしない」②が正解で、鼻母音の変化を問う基本的な出題であった。問2の正解③*symbole*は英語経由でカタカナ語化している単語で、学習者の思い込みを指摘する注意喚起問題であったと言える。

第2問 発音に加えて、形容詞の変化、派生語の知識、動詞の活用などを扱ういわば総合的な文法問題である。

派生語を問う問1は名詞から形容詞、問2は動詞から名詞、問5は形容詞から副詞への問題。

問3は形容詞の複数形、問4は時制の変化に伴う過去分詞の形を問うものだった。問1と問2の解答には英単語との混同を指摘するしかけがあり、注意喚起になっている。取り上げられている単語のレベルは中等教育のフランス語学習に十分適合していると思われる。

ところで、問1については提示の仕方にすっきりしないものを感じる。「つづり字も発音も同じものを含む単語を」選べという指示文に合わせて、問1ではcriminelの-elに対して④ficelleを正解と選ばせるわけだが、「つづり字も発音も同じもの」という出題ルールに明確に適合するのだろうか。

第3問 文中の空所に適語を入れる形式で、文法や語法の理解度を測る問題である。

問1は、ごく基本問題でありながら正答率がとても悪かった。正解④の不定冠詞までいかなかった理由として、problèmeを属詞ととらえずに別の慣用表現の一部と取り違える可能性があっただろう。一筋縄ではいかない問題だった。問2のtrois jours de plus que prévuは文法的には説明困難な慣用表現で、定着しにくいものが出題された。問3は直接目的語の様態の属詞ouvrirの形を問うもの。文法的理解の深さを測る良問だが、受験者には難しかっただろう。問6は「否定の打ち消しのsi」を問うもの。数段階を経て解答に至る、考えさせる問題だった。経験値の低い学習者には厳しい問題であった。問4は接続法の使用、問5は肯定命令文での人称代名詞の形、問7は場所の否定語を答える問題で、基本事項を扱う適切な問題であった。

第4問 引き続き、文中の空所に適語を入れる第3問と同じ形式。語彙の理解度を測る問題に特化している。

問3「ひときれのパン」は基本事項を扱うふさわしい問題だった。問1はcéder la paroleを問うもの、問2はcomprendreの多義性を問うもの、問4はpayer en espècesを答えさせるもの、問5のdéfendreと問6のplatは、どちらも「語の多義性」を問う出題。基本語を扱いながら、その二次的用法または特別な用法を問う難度の高い問題だった。特に問4のen espècesの名詞部分を答えさせる問いは、「フランス語圏滞在経験などが解答の可否に大きく影響していないか。【報告の方針(4)】」という点に抵触するのではないかと指摘しておきたい。共通テストの方針の通り、基本語という手掛かりから受験者が理解を進められるレベルでの出題を望む。

第5問 対話を完成させる問題であり、4技能の総合的な育成が求められている中で、会話体としての出題にもますます工夫がされていることと推察する。

問3の「水やりをした人に対する感謝ではなく非難」というやりとりと、問4の「自分もゴールを決められる、と豪語する者が、実はサッカー未経験者」という設定は、因果関係や対立を正確に読み取れているかを測る、工夫のある出題であった。が、同時に設定の不自然さを感じる、解答しにくい問題だっただろう。

第6問 整序作文。和文仏訳で、自らの考えを述べる自由作文の前段階として、文法や構文を中心とした作文力を問う問題である。並べ替えの語(句)の単位は6個、問うのは4番目の語(句)というルールで統一されている。日本語とフランス語の間の発想の違いが問題のポイントになると難易度が上がる。そのような問題に当たる問3にしても、主語が提示されていることで、基本語valoirを丁寧に扱えば正解に至る。全体的には基本的な表現の出題だったが、問5のavoir beau + inf.を扱う出題で、inf.が完了形になるという点は特別難解であった。「高等学校の学習範囲から逸脱しない問題であったか。【報告の方針(3)】」という点について、特に指摘しておきたい。基本語という手掛かりから受験者が理解を進められるレベルでの出題を重ねて希望する。

第7問 情報処理能力を問う出題で、与えられた情報から判断し発信できるか問われている。

今年度はA「星占い」、B「量り売り店の説明」が主題に取り上げられていて、話題としては大変興味深い内容であった。資料を読み取り、またその解釈をフランス語で表すものを見つ

ける手順になろうが、昨年度までのものと比べてより複雑である。Aでは、問3で尋ねられている内容の中で、例えばおうし座にあるrester positifをfaire des efforts pour voir les choses du bon côtéに、うお座にあるêtre récompenséをporter ses fruitsと解釈するのは難しい。また、どちらも生活に即した語彙・表現が多くあり、基本語ではあってもフランス語で生活する経験の有無が解答に影響しただろう。Aではorganiser une soirée がfaire une petite fêteに言い換えられている点、Bでは、問2のbeurreがles produits à base de laitに相応するものであることを認識しなければならないなど、設問には生活用語が散見され、「本」を通して学習している多くの受験者には厳しい出題になった。

この第7問は、そもそも「別々に示された図表と会話を関連付けながらフランス語の資料を読み解く能力（令和3年度報告書問題作成分科会の見解より）」が求められている。とはいえ、今年度のもは星占いの話も量り売り店の話も、様々な要素を組み合わせないと解答できない問いになっていた。組み合わせるべき要素が多くなればなるほど、問題の難度は上がるものである。例年は資料を読み解くことを主眼にしたよりシンプルな設問だったので、今年度のひねりの多い出題の仕方は特別であった。たくさんのフランス語を読むというような訓練だけでは、得点向上に結び付きにくい問題だったのではないか。これは、「【報告の方針(1)】受験者の実力差を判定できる試験となっていたか。」にも疑問を残す。

第8問 文意を捉えられているかの理解レベルを細かく測れる長文読解問題である。全体の中では元々配点も高く重視されているが、共通テストになり更に配点が10点増えた。

今年度は、コンゴの首都キンシャサで女性だけのタクシー会社が成功しているというエピソードである。しっかり読んだ受験者への激励になるような内容で、時事問題を扱う工夫のある出題であった。ただ、justifierやfournirという語の使い方や、タクシーで飲み物がサービスされる、という想定外の状況を思い描くこと、また、会社が銀行口座とカードを作ってやる事情を読み取るのは、簡単ではない。

3 ま と め

例年どおり基本事項を問う工夫のある問題をめざして、発音、語形変化における不規則なものについても、中等教育レベル内から出題された。またフランス語の運用能力を幅広く問うという点でも、昨年の共通テストを踏襲した問題作成であったと評価できる。ただ、仔細に見ると、いくつかの傾向が見られた。

ひとつは、基本語義・基本表現にとどまらない、さらに一歩進んだ知識に関する出題である。プラスアルファの部分が問われ、より難化した。

もうひとつには、英語に類似した単語が選択肢に多く出題されている点である。発音にせよ、綴り字にせよ、より正確な知識が問われているといえる。これはマークセンスのもつ、「記憶が曖昧でも選択肢から思い出せる」という欠点を補うものであるかもしれない。

内容と範囲に関して、従来のテストを踏まえたものと評価できるが、よりひねりのきいた、解答に手間のかかる設問であった。

分量と程度に関しては、従来のそれから逸脱したものではなかったと評価できる。第1問から第8問までの構成は昨年と同じであり、基本的な内容から応用的な内容へと進行するかたちで配列されている。ただ、第8問の長文読解の出題文は昨年度よりも5行増加していた。

表現と形式に関しても、昨年の共通テストを踏襲したものになっているが、やはり難度が上がる傾向があった。特に、第7問と第8問について、解答にあたり様々な要素を組み合わせる、高い運用能力を問う問題だったこと、そして「最も適当な〇〇を選ぶ」ストレートな問いではなく、「〇

○でないものを選ぶ」という問い方の設問が増加した。(4カ所：第7問A問2，同B問1と問2，第8問問3)このような問い方はより緻密な検証を必要とするので，当然難度があがり時間がかかる。昨年度共通テスト(1)は『第8問問5』の1カ所のみであった。

ところでこの令和3年度共通テスト(1)『第8問問5』について，令和3年度報告書【問題作成分科会の見解】中で，フランス語第8問長文読解に関する分析として以下のように書かれている。「問5の識別力がやや低かったのは，本文の内容と一致しないものを選ぶという問題形式によるものであろう。」(傍点本稿筆者加筆)。このことを認識されていた中で，実際は令和4年度に上記のように出題されたことを，さらに遺憾に思う。難易度が上がったというだけでなく，識別力について低くなった可能性を懸念する。

フランス語を第一外国語として学習している学校からの受験者は集団として学力が高く，力としては上位集団に所属する生徒が多いと想定される。例年「英語」よりも「フランス語」の平均点が高いのは，難度が低いのではなく母集団の違いと考えられてきた。そういう性格である受験者群のフランス語平均点が，センター試験を含めて過去最低，5つの外国語で最も低い，という今年のテストの特別な結果は看過できない。

こうした分析をふまえると，今年のフランス語の平均点が，センター試験時代と比べて低くなってきた昨年度と比べて，さらに100点換算約8点低下した理由は，端的に言えば，例年より難度が高く考えさせる問題が大幅に増えたことであろう。そのため，試験時間が足りない(見直しの時間が足りない)と感じた受験者が多かったと推察する。

もちろん，高校の授業において改善すべき点も見えてくる。第一は，英語との類似に留意させるということである。外国語との出会いの始まりは多くの生徒にとって英語であるはずで，だからこそ異同を意識させることで記憶の助けにつなげたい。第二は，多義語の学習である。基本語のもつ「もう一つの意味」を意識させたい。第三は，同義表現に留意させるということである。単語レベルでの置き換えだけではなく，同一の内容を様々な表現であらわすことができるという点に注目させることで，豊かな表現力と受容力の向上に結びつけたい。

最後に要望を申し述べさせていただきたい。

第一は，基本問題に立ち返っていただきたいということである。問題を作成される立場を想像するならば，過去問をふまえつつ常に新しい切り口を追求されておられるはずであり，そのご苦勞は想像を絶する。とはいえ，共通テストの作成方針にあるように「英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し」，応用レベルに上振れしないことを切望する。

第二は，これに関連するが，日本国内における学習経験しか有しない受験者を念頭に引き続き問題作成をお願いしたいということである。今回の出題では，en espècesのように，海外経験がなければ解答が難しいと思われる表現が散見された。基本語だけの問題構成でも十分に識別力は高いと考えるしだいである。

第三に，今後も「フランス語」の共通テストの存続をお願いするものである。現在コロナ禍にあるわたしたちは，かつてないほどに世界との結びつきを意識して生きる必要に迫られている。その際に外国語を学ぶことは，自分を現在の世界の中に位置づけることにつながるだけではなく，過去から現在に至る時間軸の中に自分を位置づけることにもつながる。その意味で，共通テストの外国語試験が複数の外国語から選べることは，高校生にとって貴重な機会であり，そこにヨーロッパを代表する言語であるだけでなく，歴史的文化的に世界に広く影響力が及ぶフランス語が含まれていることは象徴的な意味をもつ。

あえて英語に加えてフランス語を学ぶという，さらに十分な忍耐力と知的好奇心が要求される選択をする生徒には，ユニークな生徒が少なくないというのが高校の現場にいる教員たちの実感であ

る。そうした学習意欲の高い生徒の受験機会が増加に転じることで、大学に一層の多様性がもたらされることを願うものである。この場をお借りして大学関係者の方々にお願いする。共通テスト問題作成委員の先生方は、学習指導要領もなく到達度も明確にされていない中、受験者の実力を測るために識別力の高い問題を作成してくださっている。その共通テストを現在のみならず将来のフランス語学習者のためにも、大学教育の入り口として今後も幅広く実施・利用していただきたい。